

第125回 日文研フォーラム



年末・年始の聖なる夜

— 西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究 —

Oh, Night Divine

— A Comparison between Japanese and European New Year Customs —



エミリア ガデレワ

Emilia GADELEVA

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

年末・年始の聖なる夜

— 西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究 —

Oh, Night Divine

— A Comparison between Japanese and European New Year Customs —

● 発表者 ●

エミリア ガデレワ

Emilia GADELEVA

国際日本文化研究センター 中核的研究機関研究員

Lecturer, Int'l Research Center for Japanese Studies



2000年1月11日（火）

発表者紹介

エミリア ガデレワ

Emilia GADELEVA

国際日本文化研究センター 中核的研究機関研究員

Lecturer, Int'l Research Center for Japanese Studies

平成2年7月	サンクト ペテルブルグ大学（ロシア）東洋学部東洋史学科 日本史専攻卒業
平成3年4月	奈良女子大学文学部日本史学科専攻生（平成5年3月まで）
平成5年4月	奈良女子大学大学院文学研究科日本史専攻進学
平成7年3月	奈良女子大学大学院修士課程修了
平成7年4月	奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻進学
平成10年3月	奈良女子大学大学院博士課程修了
平成10年3月	奈良女子大学博士（文学）
平成10年4月	就任（平成12年3月迄）

主な著書・翻訳等

- ・「日本神話におけるスサノヲ命」修士論文、平成7年、奈良女子大学
- ・「神話からみた日本の農耕儀礼」『寧楽史苑』平成9年
- ・「古代の日本の神話と神々の崇拜」博士論文、平成10年、奈良女子大学
- ・「ことばと表現の文化」『まほら』平成11年
- ・「日本神話におけるスサノヲ」『日本研究』、第22集、平成12年発行予定
- ・"Susanoo - One of the Central Gods in Japanese Mythology" *Japan Review*
no.12 2000年発行予定

はじめに

世界の多くの家々で大事に祭られるクリスマスという行事における象徴がどのような意味を持つかといえ、それをキリスト教的な説明だけで十分に理解することは不可能だと思えます。これらの象徴について考えていくうちに、私は日本のお正月行事との類似性に気がつきました。そこでキリスト教以前の伝統に根をおろすヨーロッパの年末行事と日本のお正月の比較研究をしたいという気持ちが生まりました。そのきっかけとなったのは次のことです。

何年か前に、本物のクリスマスツリーが日本にないことを寂しく思い、この時期に本物のモミや松の木を何本も売っているヨーロッパのことを思い出したのです。そして、やっとクリスマスが終わり、お正月のものが店にならべられたところ、クリスマスツリーにふさわしい松の枝が花屋さんにいっぱい現われたのです。それは門松を飾るための枝でした。門松とクリスマスツリーが似ているのだと、そのとき初めて感じました。その後、この季節の日本とヨーロッパの様子を比較して、考えていくうちに、その類似性に気付き驚きました。

西洋のお正月といえば、日本人がまず思い浮かべるのはクリスマスです。その説明のほとんど（学術的なものも含めて）が、そのときにイエス・キリストの誕生を祝うといえます。「クリスマス」という言葉自体は、キリストをたたえるミサを意味します。しかし実は、この日がイエスの誕生祝いに選ばれたのは、ヨーロッパの各地で行われていた、キリスト教の立場からはいわゆる未開 (pagan) の、キリスト教以前の祭りを止めさせられないので、そこにキリスト教的な意味を与えらためでした。祭りの様々な要素にキリスト教的な解釈がなされましたが、どうしてツリーなどで家を飾り、七面鳥または豚の丸焼きを食べ、サンタクロースからおくりものをもらうということの意味があいまいになったのでしょうか。他方、日本のお正月といえば、おせち料理、門松や鏡餅、お年玉が思い浮かびます。

これらの行事は現在、様々な面で変容され、かなり商業化されていることは研究者がよく指摘する通りですが、その伝統はいうまでもなく太古にさかのぼるものです。日本の神々の本質を探って見ている私は、日本とヨーロッパの古代のお正月行事を比較研究することがその参考にならないのかと考えました。

そこで、今回は、現在私たちが楽しく祝うこれらの行事の古い内容を探って、その意味を考察してみたいのです。その比較の前提になっているものは、日本の

側からは、もちろん柳田国男の年中行事の研究と山中裕氏の『平安の年中行事』などであり、ヨーロッパの神話についてはエリス・デービッドソンなどの研究です。

1. 年始の時期をめぐる観念

年中行事というのは、太陽と月の運行により季節が変わるということを基盤におくものです。カレンダーが用いられる以前には、祭りは太陽、月や他の遊星の動きの観察をもとにして、また農業、漁業や狩猟などに大事なときや季節の変わり目の時期に行われたのでしょう。太陽の動きに従えば、一年のポイントは冬至の最も長い夜であり、月の満ち欠けのサイクルでは、一月十五日あたりの新月がこのようなポイントになります。これらのポイントはそれぞれ太陽暦と太陰暦の年末・年始の祭日を決めるものとなりました。これは、山中裕氏のことばを借りれば、いわゆる「民間暦」^①を築造したのです。これに対して、国家が確立すると同時に、全国に共通するいわゆる「公暦」が定められたのです。

日本の年中行事に大陸風の年月の数えかたが多少なりとも影響を与えたのはかなり太古にさかのぼるでしょうが、日本に中国から暦が伝えられたのは、推古天

皇のときのことであるといわれています。統一した暦を用い始めると、「天皇を中心とする中央集権国家が確立しはじめ」たし、「年中行事も宮廷行事として完成」^②しはじめたと山中氏が指摘します。しかし、今回、私の研究対象となるものは、宮廷行事よりもその一面となった民間行事であり、これに注目したいのです。明治維新の後（明治六年、一八七三年）から日本では太陽暦が採用されるようになりましたが、柳田国男が指摘したように、「日本の正月行事も盆行事も、あるいは新暦でおこない、あるいは旧暦でおこない、あるいはまた暦法だけは新暦によるが、行事の期日はなるべく旧暦に近づけようとする一月送りでおこなうものもあり、現状はまちまちに乱れてしまった」^③のです。

ヨーロッパでは、ローマ時代の古いカレンダーはやはり太陰暦であり、一つは十カ月の太陰年をもとにして紀元前八世紀から使用されたといわれていました。そのもう一つ、ローマ共和主義（Roman republican）カレンダーはローマの五代目（大王タルクイニウス・プリスクス（Tarquinius Priscus）の時代（紀元前六一六—五七九）に完成され、一年を十二カ月三五五日としたのです。そして、ユリウス・カエサル（Julius Caesar）の命令で紀元前一世紀（四六BC）に完成されたユリウス暦は、太陰暦のかわりに太陽暦にもとづき十六世紀まで採用されたものです。

このカレンダーをさらに改正して、一五八二年に現在まで全ヨーロッパで採用されているいわゆるグレゴリオ暦が作られたのです。このカレンダーは、一月一日を年の始めとして固定した新暦として知られており、それに対してユリウス暦は旧暦となったのです。両者は十二日間の違いがあり、例えば後者ではクリスマスは一月六日にあたるのに対して、前者によればそれは冬至のすぐ後の十二月二五日にあたるのです。ということは、ヨーロッパにも旧暦と新暦というものがあり、行事の日付けがときに乱れる原因となります。

年中行事の祭儀において、人々の生活に大事な事柄が象徴的に表されることは遠い過去の時代からです。現在私たちは、これらの象徴に新しい意味を込めたり、内容を変容させたりしますが、本来の意味を知ることができれば、行事の意味も、伝統を守るためにやり続けるよりも、もっと明らかに、心に親しいものになるのではないかと考えられます。以下に、年末・年始の行事における象徴を考察したいと思います。

柳田国男は、日本人が「正月の満月の夜を一年のはじまりとし、その機会に年始めの行事をしていた。それが後に大陸から輸入された暦制の影響によつて、正月元旦を一年のはじまりとする風が、京都を中心として次第に諸地方へ普及して

いった」と考え、「そして朔旦正月を大正月、望の正月を小正月、または大年小年と呼び分けることになり、正月は年に二度あるものと考えられるようにさえなつた」^④と指摘します。しかし、私は、日本人が月の動きを読みながら、同時に太陽の運行も気にしたのではないかと思います。そのため、年末・年始の行事は、冬至辺りから始まり、正月の満月の夜にピークを迎え、二月の始めに終わったのです。年送り・新年迎えの行事は一日の祭りというよりも、何日かにわたる、時には一ヵ月ほどの長い行事として祝ったのです。柳田国男によれば、門松の古い形は、家を松などの常緑樹の枝で飾り、中心に松の一本を飾るということ、そのいわゆる「松迎え」は十二月十三日に行ったのです。これについては後で詳しく述べますが、ここではとりあえず「こよみ」という語の意味、すなわち「日読み」を思い起こしてみても、様々な行事は陰暦のみならず日、太陽の動きを読み取ることに由来することを確認しておきたいと思います。

ヨーロッパでは、月の運行にもとづく暦を採用した古代ローマ人に対して、北西欧の諸民族は太陽の動きを大事にしていました。エリス・デービッドソンによれば、ケルト人にとっては、一年は冬と夏の二期に分けられており、新年が一日の Samain という行事で始まり、それは同時に冬の始まりとして考えられたの

です。Samainという語自体は「夏の終わり」を意味するといえます。そのときには、冬の寒さにたえられない家畜が殺され、冬中の食料として保存されました。また、季節の変わり目の時期に、死者の世界の戸は開いており、死者が人々の世界をおとずれると考えられたのです^⑤。

他方、日本では、柳田国男が指摘したように、「一日の境も、古くは夜の始まる時刻にあると考えられていた。それだから、今日でいう大晦日の夜の食事が年取りの膳であり、その時に人々はみな、めでたく年を一つ重ねた」^⑥のです。興味深いことに、古代ヨーロッパでも日本と同様に、一日は晩から晩まででした。『ガリア戦記VI』においてユリウス・カエサルは、ガリア人にとって夜は朝より先であり、クリスマスがクリスマススイブで始まるのと同じように誕生日や月の始まりなどの祝いを夜に行ったと書いています。

三五〇年にローマの主教ユリウス一世によって初めて十二月二五日はイエスの誕生祭として決められます^⑦。が、それ以前には、この日の前後の時期はヨーロッパの諸民族の間では年末・年始として祝われていたのです。そのため、このような行事の習わしを受け継いだクリスマスは、日本のお正月行事と比較できるもの、むしろ比較すべき対象であると思います。お互いに影響を与えることもない、遠

く離れた地域での行事ですが、驚くほど似ている点があり、人々の考え方の類似性を語っています。他方、形は似ていてもその根拠や意味の異なるところもあり、文化や神々崇拜の違いがどこまで考え方に影響を与えているのかを示しています。

2. 神を迎え送る時期、正月とクリスマス

正月の行事全体の中心が神を迎える宴を行うことにあったという考え方が柳田国男の研究の大きな結論です。「年の神は家の神」において氏は、「正月早々から一家の主人が家を留守にするといふことは有り得ないことである。私たちの家などの慣例は、除夜から元日は公けの勤仕の外は家から出て行かない。さうして夜どほし起きて居るといふ忌籠りはもう無いが、其代りには年越の宵のおせちと、翌朝のいはゆる雑煮を祝ふ時に両度、神棚に燈明を上げ神酒と神饌を供へて、もとは其御前で一同が、はいお目出たうを交換したものであった。」^⑧と述べます。つまり、元日の晩に実家で過ごすことには、「忌み籠り」の意味があります。また、その時に、正月様または年神を迎えることは、この時期の飾りからわかります。神の木（常緑木、榊など）またはある象徴的な物（剣、鏡、玉など）をヨリシロとして降臨すると考えられたのは、日本の神祭の大きな特徴でしょう。そして、

お正月の場合にも、松を立てるのはそのためだということが柳田国男の研究からわかります。もともと、お正月祭に用いる様々な木は、年木または新木と総称されます。それが、地方や飾り方や飾る時期によって、松飾り、餅花（小正月に飾る）、祝い棒（図1、2）、占いの粥杖または粥だめしなどと呼ばれているのです。氏によれば、門松というものは、本来、門の前に進出したものであるよりも、「家」の表入口に軒近く立てたものを、特に立派にする場合も有るといふに過ぎない」のです。そのものとの形は、「家によつては一つ／＼の小屋の口、井戸にも閑所にも悉く之を飾るが、その中にはおのづ

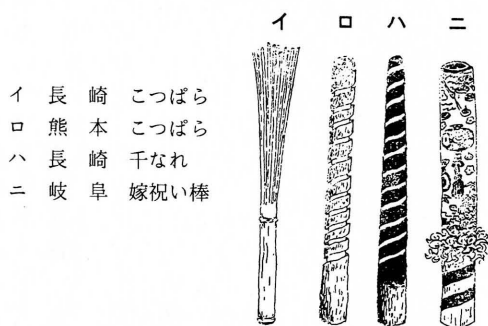


図1. 祝い棒（柳田国男監修『年中行事の図説』より）



図2. 祝い棒の例（柳田国男監修『年中行事の図説』より）

から中心があり、殊に念入りな大きな一対を、立てる場所は大よそ定まつて居た」ものです。この松は、本来、年神の降臨する神木の一種でしたが、木の種類は土地によって様々だったのです。例えば、山形県では、檜や、椿や、タラなどが、愛知県三河の山地では、竹や櫟、また他の種類の木が用いられています^⑨。柳田国男は、次第に松の木が多くなり、それに統一されていったのは、一つの流行にもとづいた現象であつたといひます。しかし、私は伝統というものは、時間とともに、統一されたものへ変容されたり、新しい意味を加えられたり、あるいは他の地方の行事の影響によって形がかわられたりしながら続くものだと思います。それはともかく、山から持ってきた松から、「枝振りの好い大松を中心にして、是に白紙の幣を剪り掛け、又はホダレともカイダレともいふ削花を添へる」ものもあり、そこにはよく「意外な物」、ある形の食器がぶら下げられましたが、それらは、「神に供物をさし上げる食器」^⑩でした。その風習は、さまざまな名前で呼ばれ、様々な形で関東から中部地方、近畿、四国、九州まで広まっていました。『その木に降臨した正月様に、その祭の幾日間かの供え物を献ずる器』^⑪だったのです。さらに、「もう少しこの初春の松飾りのことを談るならば、是等の松の木は、農村では今なほ一般に『迎へ申す』と謂つて居る」^⑫らしいのですが、この木をい

つ立てて、いつ取りおろすのかは、正月様を祭る期間と一致していたといふのです。本来はこの「松迎へ」を「正月迎へ」とも呼んでいたが、師走（十二月の別名）の十三日に行ったということについては先にふれたと思います。

また、小正月にも木を立てる習わしがあったと、柳田国男は指摘します。一つの興味深い例は、秋田県由利郡笹子村に見られます。「ここでは年の暮ではなくて、正月六日を門松迎えといい、そして門松立てと呼ばれるのは、正月十五日の朝の行事である。名だけは門松といつても、朴（ぼく）の木が主で、それにミズキとタラの木とを二・三本ずつ添えて、一軒で時には三・四十本も立てるといふ」¹³のです。この例からもわかるように、「門松」という名前が不自然であることは氏が指摘する通りです。

さらに、柳田国男が、雪の多い東北地方や中部山地では、松の木を家の中に立てて飾っていると述べていることは注目に値する興味深い点です。それは拝み松（図3、4）または祝い松と呼ばれるもので、紙の幣などを付けて、家の中の支柱に飾ったのです。¹⁴これが何よりもクリスマスツリーに似ていることは、氏も指摘されています。また、クリスマスに対しての氏の正確な理解にも注意しておきたいと思います。「クリスマスはキリストの生誕記念日となっているが、本来は冬

至の祭であつた。すなわち一年のうちで日が最も短く、夜が最も永くなる極点、そしてそれより一日一日と太陽の恵みがしげくなる轉換点、そのいわば一種の重要な境目における祭であつた」^⑮ という

説明はこの学者が、日本の祭の深い意味だけではなく、外国の祭の本質を深く理解しようとしたことを語っていると思います。さらに、氏が正しく推察したように、クリスマスツリーには、家に神を迎える聖なる木という意味があるのです。しかし、

これには他方、宇宙樹の深い意味もあると考えられます。

クリスマスツリーの伝統は、よくドイツに由来するといわれます。史料に、飾り付けられたクリスマスツリーが初めて現われるのは一五〇九年のルカス・クラナハ (Lucas Cranach) (父) の絵においてです。以後、十九世紀まで広く飾られるこ

図3



図4



図3, 4. 拝み松 (柳田国男監修『年中行事の図説』より)

とはありませんので、クリスマスツリーを飾るのはそのときからの伝統であるといわれています。しかし、サミュエル・マセーによれば、それは、ドイツのキリスト教化を完成させたセイント・ボニファス (St. Boniface) が八世紀にオディンという神の神木ナラ、カシの木をイエスをたたえる松、モミに変えたことから始まったのです^⑯。というのは、聖なる冬至の夜の直前に飾られるこの木は、何もないところから突然に考え出されたものではないのです。この風習は古い伝統にさかのぼるものなのです。ここで、どうしてクリスマスツリーがキリスト教の行事に取り入れられたのかということを考えようとすると、ヨーロッパ諸民族にとつての樹木、とくに常緑樹の意味を説明しなければなりません。

ヨーロッパの諸民族の神話においては、宇宙樹とも世界樹(図5)とも呼ばれているものが有名です。古代文献からわかるように、スカンディナ비아人の宇宙は土地を丸で表し、その中心に世界樹を置き、土地の周りは海が広がっているという風に描かれています。この世界樹の根元には命の水の泉がわき、その根の下に数多くの生き物が住み、他の生き物はその枝に住むと考えられたのです。北欧の神話における世界樹は、山や森を祭場としていたことに由来するのだらうとエリス・デービッドソンが指摘しているとおりだと思います^⑰。また、中央に置かれ

た木は、幸運 (luck) や神々の保護を得るためであり、ゲルマンやスカンディナビアの民族の間に、家のそばに守り木 (guardian tree) を植えるという習慣がみられますが、十九世紀のブレーメンのアダム (Adam of Bremen) ^⑮ は、犠牲として人間を含めて神々への供え物が選ばれた木の枝からぶら下がっていたと伝えています。

世界樹の下には神々が集い、相談すると信じられていたし、アイルランドではこの中央樹は人間の世界と死者や神々の

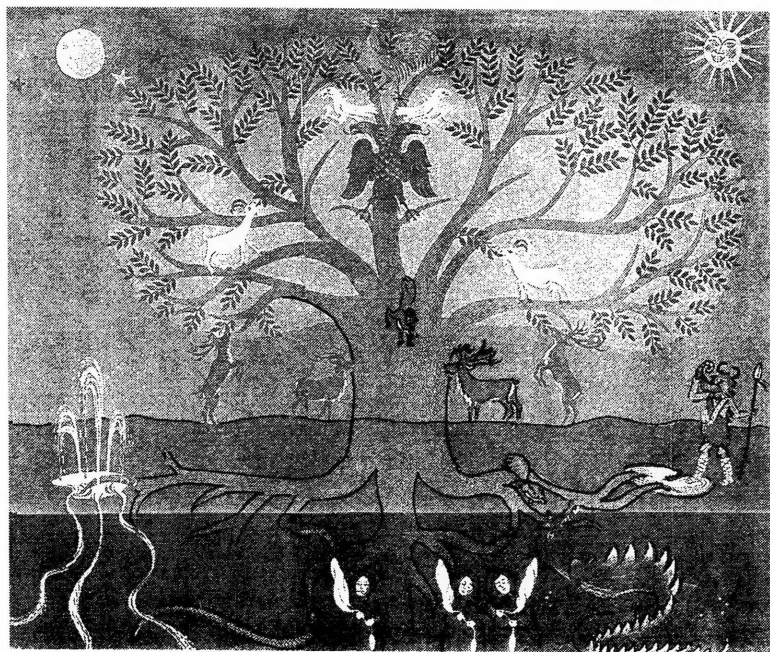


図5. スカンディナビアの世界樹 (A. Eliot, M. Eliade, J. Campbell *Myths* McGraw-Hill Book Co. 1976 より)

両他界とを結ぶものと信じていたのです。アイルランドでは、このような聖なる木には毎年りんごやハシバミの実やカシの実がなっているといわれます。さらにこの木は常に緑であり、その葉っぱがいつも枝についていると考えられたのです¹⁹⁾。ここで注目したいのは、北欧の世界樹にもっとも多いのはトネリコ (ash) などの広葉の木ですので、クリスマスに飾るモミまたは松の木とは直接には結びつきません。しかし、八世紀に突然モミや松を考え出したとも思いません。世界樹は常に緑だということが強調されていますし、年末・新年始の大事な冬至の時期に、家々を常緑樹の枝で飾る風習は、このような考えかたと無関係ではないと考えられます。スサン・ドリユリーが指摘するように、真冬 (midwinter) の祭りのときに家々を常緑樹の枝で飾ることはかなり古い習わしです。自然の全てが死んでいくように見える時期に栄えるこれらの木々が、生命の力を象徴すると考えられたのです。冬至あたりに行われたサツルナリア (Saturnalia) や一月一日ごろのカレンヅ (Kalends) という古代ローマンの行事、冬至を祭ったスカンディナヴィアのユール (Yule) 祭りや、その時期に行われた他のヨーロッパ民族の行事には、月桂樹 (laurel)、ロゼマリー (rosemary)、泰山木 (bay)、ツゲ (box)、モミ、松 (fir)、イチイ (yew) が用いられましたが、もっとも広く普及しているのは西洋ヒイラギ

(holly) や、ツタ (ivy) や、ヤドリギ (mistletoe) です。これらの木々は、真冬にも緑であるだけではなく、実を稔らせるからでしょう。飾りをいつからいつまで飾っておくかは定められていましたが、その時期は地域によって多少異なります。二五日が過ぎればすぐに取り下ろすこともあれば、旧暦のクリスマス（一月五日）まで置くこともあります。また、人々を保護する力があると考えられたヤドリギを用いるところでは、二月一日まで飾っておくこともあるのです^⑩。ところで、ヤドリギの下でのキスはかなり有名ですが、その由来を説く伝説は、やはりイエス・キリストよりも冬至の太陽と関係があります。ラウラ・マルチネズによれば、北欧の太陽神バルデル (Balder) は、自分が死ぬという夢を見ました。彼のお母さんフレイヤー (Freya) は、夢が現実にならないように、全ての生き物に息子に害を与えないという約束をさせたが、ヤドリギと約束をかわすのをわすれてしまいました。ある悪神はヤドリギで矢を作り、バルデルを射ったのです。しかし、お母さんの愛情のおかげで彼は死なないで生きかえることができました。そして、しばらくの間姿を消しかけていた太陽は、冬至の後再び輝いてきたのです。フレイヤーの涙がヤドリギの実となりました。彼女は、むすこへの愛情の象徴として、ヤドリギの下を通るみながキスするようにしたのです。他方、ヨーロッパのデュ

ルイド族は、家畜を病氣から守るために、家畜室の入口の上にヤドリギの枝をかけたなり、その枝で占をしたりしました^②。このように、長い伝統があるこの木に對しての信仰はキリスト教が入ってもすてられなかったもので、新たな意味を与えられて、キリスト教に受け入れられたのです。キリスト教の習わしとしてこの木が「光りの中の光り」(“the light of lights”)の象徴となり、イエス誕生の表象とされたのです^②。

このような伝統を背景にして、クリスマスツリーは聖なる世界樹を象徴するともいえるし、家々を世界、宇宙と結びつけながら、新年に幸運と神の保護を獲得するものであり、その飾りは神々への供え物を象徴するとも考えられます。日本の年木の意味と大そう類似するこの象徴は、年末・年始に家で神または神々を迎えて、新年への祈りをささげたことを語っています。では、この神はどこから訪れる何者として考えられたのでしょうか。これについては、以下に考察することにしてしましよう。

3. お年玉とクリスマスプレゼント

サミュエル・マセーが指摘するように、クリスマスにプレゼントを持って来る

サンタクロースには、良い子供にはプレゼントを持っていても、悪い行いをした子供にはプレゼントをあげないとか、彼らをたたくために棒を持っており、または後で食べるように悪い子を大きな袋に入れるといった恐い面があります^②。これはただ子供の教育と関係があるのではなく、もっと深い意味があると思います。その意味の解釈を以下に考えましょう。

先にいいましたように、冬至の時期の祭りには、木を飾るということとは神を招くということを意味します。では、この時期に古代ヨーロッパで祭ったのはいったいどのような神だったのでしょうか。キリスト教以前のヨーロッパでは、様々な自然の神を崇拝していました。これらの精霊は岩や滝、泉や森に宿り、人々の労働を見守ると考えたのです。しかし、日本の神々の認識と違って、これらの神々は目に見えない形のないものではなく、様々な大きさや形のあるものとして考えられたのです。その根拠は、民話に見える小人や妖精や魔法を使える女性などにかがわれます^③。ここで、アンデルセンやシャル・ペローなどの童話における妖精の役割とそれに対してのお返しを思い出してみたいのです。一つの例としてここに『妖精と靴屋さん』(図6、7、8)という話を挙げたいと思います。昔、あまり成功していない貧しい靴屋さんがいました。ある晩、彼には一足の靴を作

図6

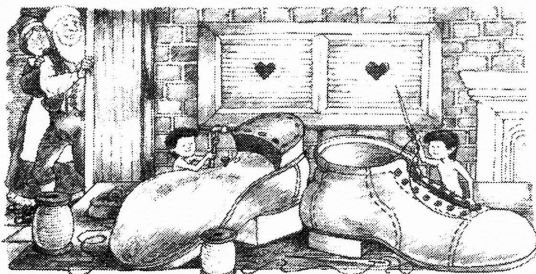


図7

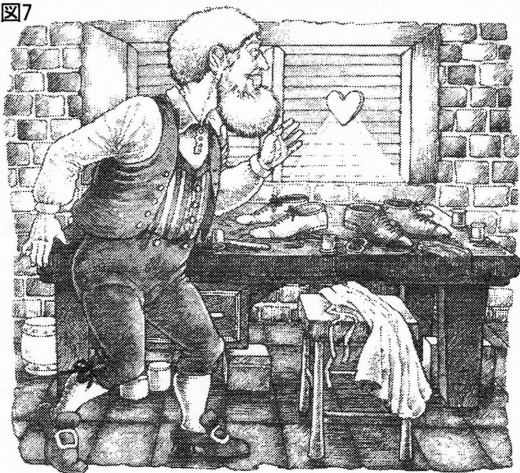


図8

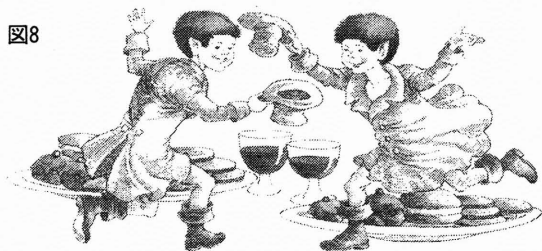


図6, 7, 8. 「妖精と靴屋さん」 ("The Elves and the Shoemaker" *Treasury of Literature for Children* Noble Books, New York 1993 pp. 34-38)

れるだけの革しか残っていないので、最後の靴を作るように、ため息をつきながら靴型 (pattern) を書いて、翌朝切って縫おうと思いました。しかし、次の朝には、驚くことにいい縫われた一足の出来上がった靴が机の上に置いてありました。この靴はすぐに高く売れて、二足分の革を買うことができました。その

晩靴屋さんは、前と同じように革に靴型を書いて寝ました。次の朝には、また、驚くことに、二足のすばらしい靴が机の上に置いてありました。このようなことがしばらく続き、靴屋さんがよい靴を作っていると評判がたって、皆が彼に靴を注文しましたので、お金持ちになりました。ところが、ある晩、奥さんと二人でだれが靴をこしらえるのかと覗いてみれば、それは二人の妖精でした。小さな体で、小さな道具を出して速やかに仕事をしていました。ただ、その妖精の体は、なんと裸でした。もうすぐクリスマスだったので、靴屋さんと奥さんが、二人の妖精にお礼のプレゼントを準備することになりました。靴屋さんが小さな長靴を作り、奥さんが小さな洋服を仕立てました。そして、クリスマスイブに二人は、そのプレゼントとお菓子とワインをテーブルの上に置いて、隠れて待っていました。いつものように妖精たちが来て、プレゼントを発見しました。大喜びで服を着て長靴をはき、お菓子を食べてワインを飲みました。こうして一晚中楽しく過ごしました。靴屋さんとその奥さんもこれを見てとても嬉しかったのです。その夜妖精たちは靴を作りませんでした。また、その後も靴を作りに来ませんでした。たぶん、見られたとわかってしまったので、もう来なくなっただけでしょう。妖精とはこのようなもので、人間に姿を見られるのが嫌いだからです。しかし、いい評

判がたっていたので、靴屋さんはもう困りませんでした。彼が作る靴は妖精が作っていた靴ほどいいねいに小さなステッチで縫ってはいなかったことに、だれも気がつきませんでした。彼は、奥さんと一緒に幸せにぐらしました。

なお、これらの神々のうち、母の女神 (Mother Goddesses) と呼ばれている、手に赤ちゃんを抱いた女神たちの小立像が数多くみつかっています。「冬の女神」とも呼ばれているこれらの母たちは、木、岩や池と結ばれており、冬に祭られたのです。ケルト人やゲルマン人が重んじ崇拝したこれらの女神は、アングロサクソン人にも奉られ、デ・テンポラ・ラチオネ (*De tempora ratione*) という史料では、作者ベデ (Bede) が説明するように、クリスマスの前の晩は *Modranicht* つまり「母の夜」と呼ばれたのです。彼女たちのために、クリスマスイブに食べ物が用意しておかれた例が多くあります^⑤。

他方、冬至の行事と関係があったかわかりませんが、サンタクロースのイメージとぴったりに重なる守り神 (guardian spirits) であったらしいものに、ガリアの頭巾を被った小立像があります。その中には、若者または子供にみえるものもありますが、髭をはやした年よりもあります。背が低く頑丈であるこれらの小立像の多くは、小人またはねこ背の人のように見え、豊穡、富のしるしであるかどうか

卵が入った籠を持っています。頭巾が人には見えない他界に属することを表わすのです。民話においてこれらの小さなものは、ある場所または家族と結び付けられ、怒らせたり迷惑をかけたりしなければ、いたずら好きな陽気なものであり、幸運や富をもたらし人々の労働を助ける者として考えられたのです。籠を持っているこれらの小立像は、秋の豊穡と結ばれる面があるのですが、サンタクロースのイメージにも全く無関係ではないと思います。それは、サンタクロースのプレゼントが富や幸運を象徴するからであると考えられます。古代ヨーロッパで年末・年始の行事が行われた冬至あたりや一月一日のころに、ご馳走を食べてプレゼントをあげる風習には同じ意味があったと考えられます。四世紀のギリシャに住んでいたリバニウス (Libanius) のカレンツという祭の描き方を見れば、テールは食べ物でいっぱいであり、人々はお互いにプレゼントをあげたりしていたのです。古代社会では、プレゼントが大きな意味を持っていたと思います。これは人を喜ばせるだけではなく、病気が直る、または生命力が復活するなどといったおまじないの意味、象徴としておくられたのです。クリスマスプレゼントにこのような意味があったことは、古代では富、生命力の象徴であるりんごやくるみ(特に金色に塗ったもの) などが贈られたこと、つまりプレゼントの内容を見れば

よくわかります。

日本にもこのような意味をこめたお正月のプレゼントがあります。それはお年玉です。現代においては、ほとんどの場合お金であるこのプレゼントは、本来は餅であったのです。これについて「年神から賜るものと考えていたらしい」と柳田国男は考えています^②。また、「九州のずつと南の方でも、除夜の年越の晩には年どん又は年ぢいさん（図9）といふ人が、好い子供には年玉の餅を持って来てくれる。それを貰はぬと年を一つ重ねる

ことが出来ぬといひ、信じはせぬまでも舶来のサンタクロウスと、全く同じ話をして居る家が多いさうだが、しもじま下甑の島の或る古風な部落などは、人が頼まれてその年ぢいさんになつて、籠を頭から被つて夜更に門の戸を叩き、子供にこの年の餅を持つて来る習はしさへあつた。：即ち多くの先祖たちが一体となつて、子孫後裔を助け護らうとして居るといふ信仰



図9. 年玉をくれる「年ぢいさん」（柳田国男監修『年中行事の図説』より）

を考へ合せると、子供に親しみを持たせる為には、是より好い名は無いのであつた。…年神を我々の先祖であつたらうといふ私の想像はここに根ざして居る」²⁹とも述べています。

このように、柳田国男によれば、お正月に訪れる神は先祖神だったのです。

「春毎に來る我々の年の神を、商家では福の神、農家では又御田の神だと思つて居る人の多いのは、書物の知識からは解釈の出來ぬことだが、たとへ間違ひにしても何か隠れた原因のあることであらう。一つの想像は此神をねんごろに祭れば、家が安泰に富み榮え、殊に家督の田や畠が十分にその生産力を發揮するものと信じられ、且つその感應を各家が実験して居たらしいことで、是ほど数多く又利害の必ずしも一致しない家々の為に、一つ／＼の庇護支援を与へ得る神といへば、先祖の靈を外にしては、さう沢山はあり得なかつたらうと思ふ。」³⁰

柳田国男の祖先崇拜が自然の神々の崇拜に先だつという説に対して、私は日本では逆であつたのではないかということについて論じたことがあります。しかし、今は、古代の人々は自然の神々と祖先神をはっきり分けていたのかは疑問であると考えようになりました。それは、キリスト教以前にヨーロッパで崇拜された神々の性格について、様々なことを考察した結果です。エリス・デービッドソン

によれば、場合によって人々に害を与えたり、または助けたりする前述の神々は、死者と全く無関係ではありませんでした。ドイツやスカンディナビアでは、死者がハローインとクリスマススの時期に人々の世界を訪れると信じ、クリスマスに教会へ出かける前には、彼等のために食べ物を残すという風習があったのはこのような痕跡を示すでしょう。アイスランドでは妖精が同様に家々を訪れると信じていたということ^⑪は、祖先の霊と自然の神々の間に大きな区別はなかったらしいことを語っていると思います。古代北欧諸民族の史料としてはサーガという長歌が有名ですが、サーガ (*Eyrbyggja Saga*) によれば、アイスランドで最初のスカンディナ비아人の聖なる場所は、体を洗っていない人は近づけない穢や暴力から守られた小さな丘であったのです。それは、死者が祖先に加わるように埋められた場所、また死者の世界への入口としても考えられていました^⑫。特に、大王の霊が人々の生活に影響を与えると考えられ、スカンディナビアの亡くなった大王たちが豊穡をもたらすと信じられた例の一つは、フレイル (*Freyr*) という神はもともとウップサラ (*Uppsala*) に住みスウェーデン人を支配した人物でしたが、その時代に国が栄えたので、亡くなった後には人々がその墓に供え物を持ってきて彼等の労働を見守るように願ったというところにみえます。このように、フレイル

と妖精や国守神 (land-spirits) との関係から、これらは死者と結ばれることは可能に思われます。スウェーデンやノルウェーでは、古代から大王たちの古墳の場所がわかることが大変重要だったのは、国をうまく治め、豊穡や幸運の年月を迎えた大王は、死後にもめぐみや守護を与えることができると思われていたからです。このような大王たちはそれぞれスウェーデンの主人 (Freyr, Lord) という称号をもった可能性もあるといわれています³⁹。

祖先崇拜はおそらく、サンタクロースの「父」的な要素を加えたのではないでしょう。そして、フランス語などの言語では彼は「父」と呼ばれているのはこのためでしょう。

ところで、プレゼントは子供に与えられるようになっていきますが、そこには理由が二つあると思います。一つは、イニシエーションまたは成年式の過ぎている子供は、人間世界に属しない精霊と同じくまだ社会の一部として考えられておらず、儀礼においてしばしば象徴的な役割を果たすことと関係があります。二つめの理由は、実際には親に準備され子供に授けられたこのプレゼントは、亡くなった祖先の精霊が子孫に富を与えるということを象徴的に表わすと考えられることです。

他方、お正月のご馳走は、神々の供え物、そして新年の富の象徴、豊穡を願う占いの意味があったのです。前者の意味は、日本では元日に雑煮を食べるということについて、神への供え物を祭に参加する人々が分けて食べることを意味すると、柳田国男が説明するところにみえています^④。ヨーロッパで、特別な生地で作ったジンジャーブレッドマンという人形型のクッキーがツリーに飾られ、食べられることにも、同様な意味があるのです。年の始めに新年の様子を占う風習は、古代ヨーロッパにも日本にも見られるのです。

むすびにかえて

ここに注意しておきたいのは、クリスマスカードによくシーズンズ・ウィッシュズ (Season's wishes) と書いているところです。クリスマスは一晚一日の祭であるよりも、「正月」でいうように「月」、英語でいうように season, period of feasting、つまり月またはそれよりも長い期間の行事として見なされているのです。日本のお正月も元日だけで終わることなく、長く続きます。クリスマスツリーの本来的

な飾りがクッキーだったということも併せて考えれば、冬の最も寒い時期に、森か常緑樹を家に迎え、その木に森の妖精を招くように甘いお菓子を飾り、周りに御馳走を出し、歌を歌い、踊りながら、妖精を楽しませ、新年の豊作を祈ったのではないかと考えられます。そして、豊穣の約束をあらわす、妖精たちの象徴的なプレゼントとして、様々な形で特別な食べ物やお金が「年神」とか「サンタクロース」から出されたのです。

最後に、私の母国であるブルガリアのクリスマスについて少しだけ述べさせていただきます。まず、クリスマススイブの御馳走ですが、その中心となるのは丸いパン *pita* です。このパンは、昔、貧しい人でもそのためにためておいた小麦粉又はお金を使って、できるだけ白い、贅沢なパンにしました。このパンの中には、「お金が入る」ことを意味する金貨や、「健康」を意味するヤマボーシまたはミズキ (*cornel-tree, dogwood*) という木の小枝などの占い物が入れます。パンは、家の最も年上の人によって分けられ、最初の分は「神に」、それから「家に」、「畑に」、「家畜に」などと分け置いてから、年の順に家の人たちに分けるのです。私の家では、「お客さん」の分も、このような人がいるかないかとは関係なく用意していました。その夜に訪れるお客さんは、神のように扱うべきとの言い伝えが

残っていたからです。これはむしろ、この夜に家で神々を祭ることにより、突然に訪れるお客さんがそれらの神を表すことになるからだと思います。食事の途中又は終わりの方に、祖父又は父が部屋を出て、しばらくしてから母は、「そろそろボジックお祖父さん (dyado bojik) を呼んでみよう」と子供たちを誘います。子供たちは鍋やフライパンなどをもって、窓の前に大声で呼びます。そこで窓が開き、だれであるかわからないように変装した祖父か父が窓から果物やお菓子、お金を投げ、子供たちがもっている道具でそれを捕まえようとします。もちろん、キリスト教風の祈りなどもこの夜にはとても大事に行

図10



図11

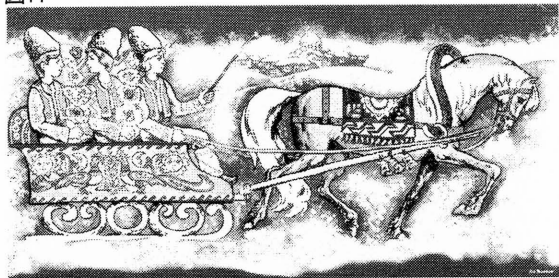


図10, 11. ブルガリアのスロワカリ (ブルガリアの年賀状より)

われませんが、わたしはこの背景にキリスト教以前のこの季節の行事の影響が十分にうかがわれると思います。そして、次の日には、スルワカリ（図10、11）やクケリという行事が行われます。都市では、前者だけの略した形が見られますが、田舎では現在でも両方が古い伝統にもとづいて行われているのです。クケリという行事は、面を冠り、鈴を付けて踊るというものです。クリスマスツリーをブルガリアでいつから飾るようになったのかを今ふれることはできませんが、先に述べた行事には、参加者の帽子や服が常緑樹の枝で飾られるのはかなり古い風習だと思います。スルワカリは、若い人（田舎では若い男、都市では性別なく子供たち）が、スルワチカ（図12）という飾られたミズキの枝をもって、家々を訪れ、歌を歌って、季節のお菓子（パン、干し果物、くるみ、りんごなど）やお金をもらう行事です。飾られた枝で家の人たちの背中をたたくこともあり、これは健康のためだといえます。興味深いことに、日本にもこのような行事があります。「祝い

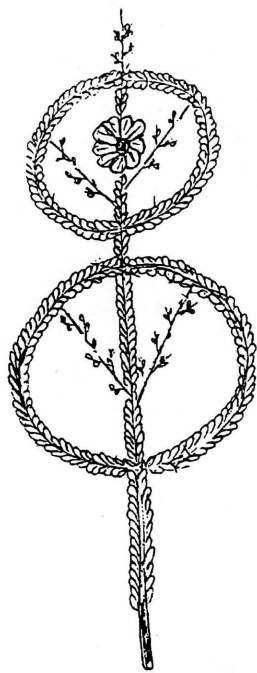


図12. surovachka（スルワチカ）（自画）

棒」(図1、2)または「卯杖」というめでたいまじないや予祝の願いを込めた聖なる棒で、若い女性のお尻をたたいて、たたかれた人が子供を生むという小正月の行事です。この行事は古代から貴族や女房社会でも行われたことは、平安時代の文学からわかるのです。『枕草子』にも、『心地よげなるもの卯杖のことぶき』(八〇段)とあり、正月を祝うもので女房たちは、これにたいへんすがすがしいものを感じたのであろう。『散木奇歌集』にも、

はつうの日よめる

あさましやはつ卯の杖のつくづくと思へば年のつもりぬるかな
とあり、(中略)、卯杖に長寿の祝の意味のあったことが感ぜられる」^⑧。さらに、柳田国男によればこのような棒で、正月十五日の粥をかきまわして年占いをしたり、田の水口に立てて豊作を願った例もあります^⑨。豊穰、健康をもたらすこのお正月に使われる棒は、ヨーロッパのおとぎ話にでてくる魔法の棒と何らかの関係がないでしょうか。他方、「ほとほと」(図13、14、15)という日本の行事は、もちやおかしをもらいに家々を巡り歩く若い人や子供たちの姿がブルガリアのスルワカリを思わせますし、秋の行事、ハロウィーンにも似ています。

それぞれの文化の差異によって、ヨーロッパや日本の人々が冬至から正月の満

図13

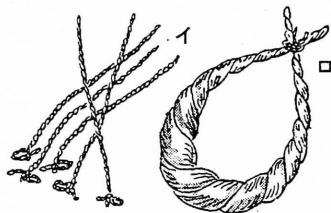


図14



13. 山 形 かせぎどり
 14. 鳥 取 ほとほと
 15. 高 知 粥つり
 イ 鳥取 ほとほとんの持ってくる銭さし
 ロ 鳥取 牛のおもがえ

図15



図13, 14, 15. ほとほと (柳田国男監修『年中行事の図説』より)

月ぐらいまでの時期に行う年末・年始の行事に採用される様々な象徴の意味が異なるところがあります。しかし、豊穰や幸運の願いを込めたこれらの行事は、太古を今日と結ぶ人々の新年への期待を表わしているところで、心のつながりをもつと思います。

注釈

- ① 山中裕『平安朝の年中行事』（塙選書一九七二年）。
- ② 山中裕同右 一六頁。
- ③ 柳田国男監修『年中行事図説』（岩崎書店 一九五三年）四頁。
- ④ 柳田国男同 六頁。
- ⑤ Ellis Davidson *Myths and Symbols in Pagan Europe* Syracuse Univ. Press 1988.
- ⑥ 柳田国男『年中行事図説』（注三参考）六頁。
- ⑦ *Christmas around the World* Bailey Brothers and Swinfen Ltd, Great Britain 1974 p.3.
- ⑧ 柳田国男「年の神は家の神」（『先祖の話』筑摩書房 一九七五年）四〇頁。
- ⑨ 柳田国男『年中行事図説』一〇頁。
- ⑩ 柳田国男「神の御やしなひ」（『先祖の話』）四五頁。
- ⑪ 柳田国男『年中行事図説』一二頁。
- ⑫ 柳田国男「盆と正月との類似」（『先祖の話』）四六頁。

- ⑬ 柳田国男『年中行事図説』一二頁。
- ⑭ 柳田国男『年中行事図説』一六頁。
- ⑮ 柳田国男 同右。
- ⑯ Samuel Macey *Patriarchs of Time*, The University of Georgia Press 1987 p.131.
- ⑰ Ellis Davidson *Myths and Symbols in Pagan Europe* p.168.
- ⑱ *Upscala och Adam av Bremen*, Anders Hultgard (ed.), Nora: Nya Daxa 1997 參考。
- ⑲ Ellis Davidson *Myths and Symbols in Pagan Europe* p.170.
- ⑳ Susan Drury "Customs and Belifs Associated with Christmas Evergreens" *Folklore* vol. 98:ii, 1987 p.194.
- ㉑ Laura Martinez "Mistletoe" *Early American Life* 1992 p. 40.
- ㉒ 柳田国男「盆と正月の類似」(注一一参考) 四六頁。
- ㉓ Samuel Macey *Patriarchs of Time* p.140.
- ㉔ Ellis Davidson *Myths and Symbols in Pagan Europe* p.114.
- ㉕ 同右 一一一頁。
- ㉖ 同右 一〇八頁。
- ㉗ *Mile Christmas in Ritual and Tradition* 1912, ibid. 169 (Daniel Miller ed., *Unwrapping Christmas* p.7-8 參考)。
- ㉘ 柳田国男『年中行事図説』三〇頁。
- ㉙ 柳田国男「歳徳神の御姿」(『先祖の話』) 五二頁。

- ③⑩ 柳田国男「歳徳神の御姿」(『先祖の話』) 五〇頁。
- ③⑪ Ellis Davidson *Myths and Symbols in Pagan Europe* p.114
- ③⑫ 同右 一四頁。
- ③⑬ 同右。
- ③⑭ 柳田国男『年中行事図説』三四頁。
- ③⑮ 山中裕「女流文学と年中行事」(『平安朝の年中行事』) 三三五頁。
- ③⑯ 柳田国男『年中行事図説』八〇頁。

発表を終えて

ヨーロッパの片隅にある小さな国ブルガリアで、私には、距離も文化も遠い国日本を理解したいとの希望が生まれました。外国文化の理解へは、様々なアプローチがあります。私が選んだのは、文化の泉となる人々の考え方の内、古代人のものにとらえかたを表している神話と儀礼の研究です。そして、日本の神話を勉強することと同時に、一方親しみのあるヨーロッパ古代の神話と、他方日本古代の神話との比較が自然に私の中には生じてきたのです。それよりさらに一歩進み、両文化の比較研究を行おうと思えば、日本だけではなくヨーロッパ諸民族の神話やものの考え方をもっと深く学ぶ必要があると存じます。また、これによって古代社会に限らず、現代の私たちがもっている文化のもう一面を理解できるのではないかと考えます。

今回の発表テーマとなった年末・年始の行事もその一つの試みです。お正月の時期に常緑樹を飾ることや神霊からプレゼントをもらうことなどの古い象徴には、ヨーロッパと日本との共通性があることは興味深いことです。しかし、それらの象徴の意味は異なるニュアンスに包まれていることがわかります。クリスマスツリーの一面をてらす古代ヨーロッパの宇宙樹観は古代日本に見られないことと、年を重ねるという意味をもつ日本の年神の授かり物であるお年玉の一面はヨーロッパの考え方にはないことは、これらの象徴を生み出した文化の異なった様子に属するものです。

このようにして、自分の専門である日本古代の神話研究を手がかりにして、ヨーロッパ古代の神話との比較研究を通じて日本とヨーロッパの社会論、文化全般の比較論を構築したいと思います。そのことが小さな私の母国ブルガリアと日本、また日欧文化のかけ橋になると信じたいのです。

Emilia Gadeleu

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIBEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び一挙を中心に」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像ー現実と幻想ー」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性ー恵信尼の書簡ー」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	シュザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋ー都市社会の自由とその限界ー」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性ー猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りにー」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通して見た日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールス王伝説における主従関係 の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウィーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノビッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立 大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④5	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④6	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④7	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④8	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐる－」
④9	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854～1919) とフリーア美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選定の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 －科举制度をめぐって－」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り－平安朝文学の特質－」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史 ー南蛮美術から洋学までー」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と偽作 ー井上靖文学における『陰謀』ー」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 ー俳句の可能性を中心にー」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験ー文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見ー王朝文を中心にー」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACE 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sung 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦⑧	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「一日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧①	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪 研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル (スペイン・マドリード 国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校 助教授・日文研客員助教授) Michele F. MARRA 「弱き思惟 - 解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 バークレー仏教研究所準教授) Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 - なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) Jan SYKORA 「近世商人の世界 - 三井高房『町人考見録』を中心に -」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田 欣也 (カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・ 日文研客員教授) Kinya TSURUTA 「向こう側の文学－近代からの再生－」
99	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント (龍谷大学助教授) Pauline KENT 『『菊と刀』のうら話』
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン (カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) Theodore William GOOSSEN 『『日本文学』とは何か－21世紀に向かって』
101	9.11.11 (1997)	金 禹昌 KIM Uchang (韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 鶴田 欣也 Kinya TSURUTA (カナダ・ブリティッシュ コロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人－外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ (龍谷大学助教授) Jonah SALZ 「猿から尼まで－狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜 信杓 (韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員 教授) KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	高 文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者――休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才―語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に―金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9 (1998)	島崎 博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘 培培 (米国・バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ― 詩的イメージとしての典故 ―」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日 文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪⑪	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』－安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪⑫	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 「『道行き』と日本文化－芸能を中心に」
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Glenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪⑭	11. 1.12 (1999)	杜 勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 「『中』のシンボリズムについて－宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義－沖縄からの挑戦」
⑪⑮	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑰	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」

118	11. 5.11 (1999)	金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟－高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ－日本の言葉に反映された文化の特徴－」
120	11. 7.13 (1999)	リース・幸子 滝 (ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサ ルタント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴 力」
121	11. 9. 7 (1999)	宋 敏 (韓国・国民大学校文科大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン ノエル ロベール (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) Jean-Noël A. ROBERT 「二十一世紀の漢文-死語の将来-」
123	11.11.16 (1999)	ヴラディ斯拉ブ ニカノロヴィッチ グレグリャード (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブル ク支部極東部長・日文研客員教授) Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14 (1999)	楊 曉捷 (カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) X. Jie YANG 「鬼のいる光景-絵巻『長谷雄草紙』を読む-」

125	12. 1.11 (2000)	エミリア ガデレワ (日文研中核的研究機関研究員) Emilia GADELEVA 「年末・年始の聖なる夜―西欧と日本の年末・年始の行事 の比較的研究―」
-----	--------------------	---

○は報告書既刊

なお、報告書はホームページのデータベースで見ることが出来ます。

発行日 2000年7月14日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048
ホームページ: <http://www.nichibun.ac.jp>
問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

© 2000 国際日本文化研究センター

■ 日時

2000年1月11日(火)

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

